

## はじめに

インプラント臨床の発展で、部分欠損補綴の主演は「パーシャルデンチャー」から「インプラント補綴」へとって代わられた。パーシャルデンチャーには、違和感や着脱のわずらわしさなど、患者に嫌われる要素が多くある。また、過剰負荷からくる鉤歯のトラブルなど、欠損補綴としてのパーシャルデンチャーの予後は必ずしもよいものではない。

歯科医学の長い歴史のなかで、歯科医師はなんとかパーシャルデンチャーの欠点を克服し長期予後を獲得しようと、さまざまな工夫を行ってきたが、いまだ予知性の高い方法が確立されたとはいえない。これは、鉤歯となる「歯牙」と咬合圧を負担する「粘膜」という「硬組織」と「軟組織」の相反する組織を調和させなくてはいけない矛盾が、その臨床を難しくさせた最大の要因であったと考えられる。

このようななか、欠損補綴の主演が、装着の違和感やわずらわしさがなく、しかも動かないインプラント補綴へと移行していった過程は、歯科医学の求めた自然な流れであったと考えられよう。

しかしながら、現代のインプラント治療全盛の歯科臨床においても、パーシャルデンチャーの果たす役割が終わってしまったわけではない。いや、症例数からいえばインプラントよりパーシャルデンチャーで部分欠損補綴を行う数のほうがはるかに多いのが現状である。またインプラント補綴においてもその前段階できちんとしたパーシャルデンチャーを装着して、顎位を安定させることが要求される。

インプラントの華やかな世界の影に隠れて、衰退してしまったかに見えるパーシャルデンチャーの世界は、実は臨床の「縁の下の力持ち」としてしっかりと太い根を張ってたくましく生き続けているのである。

そのようななか、これから臨床技術を磨いていかななくてはならない若い先生方にとっては、インプラント補綴に先立ってパーシャルデンチャーの基礎をしっかりと身につけることが重要であろう。

本書では若手臨床医に的をしぼって、難しい言葉を極力避け、できるだけわかりやすくパーシャルデンチャーの基礎から応用までを筆者の実際の臨床を通してまとめてみた。即臨床に役立つことを念頭にまとめたため、経験にのみもとづいたエビデンスのない内容もあることをご容赦いただきたい。

渡辺隆史